様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１５３

研究課題名（和文）戦時における音楽生活の変貌についての歴史的研究―第一次大戦中の慈善演奏会

研究課題名（英文）historical research for the music life in social crisis

研究代表者
岡田　暁生（okada, akeo）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：７０２４３１３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：第一次世界大戦は、上流ブルジョワのアソシエーションのような性格が強かった従来のコンサートのありようを、大きく変化させた。音楽は国民全体の文化的共有財産だという意識が強まり、国家主導によって慈善演奏会が盛んに行なわれるようになって、従来コンサートにほとんど足を運ばなかった労働者階級にまで、交響曲を中心とするコンサート文化の門戸が広く開かれるようになっていくのである。本研究は、こうした社会的危機の中で、音楽受容がいかなる問題に直面し、いかに変貌するかを、第一次世界大戦の慈善演奏会を事例として研究した。

研究成果の概要（英文）： The first World War has changed the character of traditional concerts, which was a kind of association between the high Bourgeoisie. Many people insisted that concerts should be common cultural institute of citizens, and the state began to hold charity concerts for worker class, which had not been able to visit concerts, so that concert culture like symphony became accessible for wider public. In this study, charity concerts during the First World War was researched in terms of music reception in the society in Vienna.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽史　第一次大戦　慈善演奏会

１．研究開始当初の背景

第一次世界大戦に先立つ世紀転換期は、大都市の音楽生活がほぼ現代の形に整えられた時代である。人口急増に伴ってコンサーホールが次々に建てられ、例えば 1900 年のウィーンでは 1870 年の四倍もの演奏会が開かれるようになっていた。このように娯楽産業化された音楽生活は、第一次世界大戦によって根底から覆される。1914 年 8 月の戦争勃発当初、ドイツ／オーストリアでは予定されていた演奏会は全面的に中止になる。それは非常時にあっての「自粛」であり、演奏家の出兵による人員不足、そして鉄道網の遮断による演奏家の「流通」の停滞によるものであった。しかしながら翌 1915 年あたりから、ドイツ語圏のコンサートライフは目覚しい復興を見せ始める。ただし戦前に戻ったのではない。むしろ人々は、非常時にあってなお音楽が不可欠であることを強く意識し、生活の中の新しい音楽のありようを模索し始めたのである。かくして第一次世界大戦中に、ドイツやオーストリアで盛んに催されるようになったのが、慈善演奏会である。戦争未亡人や戦争孤児や負傷兵を援助する目的で、さまざまな形態の無料コンサートが提供されるようになった。

２．研究の目的

十九世紀ロマン派の終焉と二〇世紀アヴァンギャルド（新音楽）の登場の境界に位置する政治的出来事が第一次世界大戦であることは、既に今日の音楽史記述の共通の認識となっている。しかしながら、あのような音楽様式の劇的変化が生じるにあたり、戦争が一体どのような影響を及ぼしたかについて、まだ踏み込んだ研究は成されていない。そもそも、こうした考察の基礎となるべき具体的な戦中の音楽状況が、まったく明らかになっていないのである。本研究の目的は、これまで空白となってきた第一次世界大戦中のドイツおよびオーストリアの音楽生活を、慈善演奏会を例として、一次資料に基づいて明らかにしつつ、それが一九二〇年代の音楽史に与えた影響を検討し、かつ「非常時の音楽」としてのその現代的な意義を問うものである。

３．研究の方法

本研究の具体的な作業は　①慈善演奏会の統計的データの蓄積、②同時代における受容の調査、③第一次世界大戦後における展開の検討　の三点である。

(1)統計的データについてはベルリンおよびウィーンを事例とする。ベルリンで発行されていた週刊音楽新聞 Berliner Allgemeine Musikzeitung には、当地のほぼすべての演奏会評が掲載されており、慈善コンサートについても多くの情報を得ることが出来る。またウィーンの楽友協会資料室には、楽友協会ホールで行なわれたすべての演奏会プログラムが、マイクロフィルム化されている。これらにより、プログラムや出演者、主催元やコンサートの意図、さらには料金などについて、詳細なデータを知ることが可能である。

(2)主にウィーンを事例として、新聞記事を手がかりに、慈善演奏会の同時代における受容を明らかにする。音楽雑誌と比べて一般新聞からは、音楽の政治的文脈についてより多くの知見が得られるが、ドイツと比べてウィーンでは、新聞に載る音楽関係の記事がはるかに多い。また政治的カラーの違う複数の新聞（左派向け、リベラル派向け、右派向け等）を比較することによって、戦中の慈善演奏会の受容について、偏りのないパースペクティヴを得ることが可能になる。

(3)第一次世界大戦後になると、戦中の慈善演奏会をモデルとした、学生や労働者のための無料コンサートが制度化されていく。とりわけ本研究にとって重要なのは、戦後オーストリアにおいて生まれた「芸術ポスト

Kunststelle」と呼ばれる組織である。これは左派の政党が低所得者層のために一括して演奏会チケットを購入し、会員に低価格で頒布するために設立した、一種の組合である（作曲家ウェーベルンも社民党のKunststelle の指揮者であった）。これらの調査を通して、慈善演奏会の戦後における展開を明らかにする。

４．研究成果

(1)人文書院より『レクチャーシリーズ　第一次大戦を考える』の『クラシック音楽はいつ終わったかを出版し、大戦前後の慈善コンサートの状況ならびに受容を明らかにした。本シリーズは高校／大学の授業でも十分使用可能な平明さと学術研究の最先端の知見との総合を目的としている。

(2)岩波書店より『現代の起点　第一次世界大戦』全四巻を刊行した。これは朝日新聞をはじめとする新聞雑誌で大きく書評として取り上げられ、全巻が再版されたが、このうち第三巻『精神の変容』の監修をつとめ、本研究の成果を公表した。

(3)ベルリン自由大学の International Encyclopedia of the First World War 1914-18 プロジェクトに協力し、「音楽」ならびに「ウィーン・フィルハーモニー」の項を執筆した。両項目において大戦中の慈善コンサート受容は非常に重要な主題である。

(4)2014 年 1 月 12・13 日に京都大学において、国際ワークショップ「第一次世界大戦再考：100 年後の日本で考える」を開催した。本ワークショップにはジェイ・ウィンター（エール大学）、オリヴァー・ヤンツ（ベルリン自由大学）、ジョン・ホーン（ダブリン大学）、アネッテ・ベッケル（パリ第十大学）、ゲルハルト・ヒルシュフェルト（シュトゥットガルト大学）という、この 20 年の欧米における第一次大戦をリードしてきた研究者五名を招待した。その内容は岩波書店の『思想』2014 年 10 月号に収録されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７　件）

① Akeo OKADA、Imaginary Song of the West: Ryuichi Sakamoto, Masahiro Miwa and the Music of Postmodern Japan 、Contemporary music in East Asia (ed. by Hee Sook Oh), Seoul National University Press、査読有、2014、 153-166　DOI なし

② Akeo OKADA、The First World War. A Trans-Disciplinary Study 、The World during the First World War (ed.by Helmut Bley and Anorthe Kremers)、Essen: Klartext、査読有、2014、369-371　DOI なし

③Akeo OKADA　The First World War. A Trans-Disciplinary Study, in: The World during the First World War (ed.by Helmut Bley and Anorthe Kremers), Essen: Klartext 2014, p.369-371　DOI なし

④ Akeo OKADA、Reduktion, Repetition und Verstärkerung — Klavierübungen und musikalisches Denken des 19.Jahrhunderts、Verkörperungen der Musik. Interdisziplinäre Betrachtung (ed. by Jörn Peter Hiekel and Wolfgang Lessing)、Bielefeld: Transcript Verlag、査読有、2014、255-286　DOI なし

⑤ 岡田暁生、芸術史のための大戦研究ｖｓ大戦研究のための芸術史、『思想』10 月号、査読有、2014、112－116　DOI なし

⑥ 岡田暁生、「芸術」の崩壊と大衆文化、『現代の起点　第一次世界大戦』シリーズ第三巻、『精神の変容』（岡田暁生・山室信一・小関隆・藤原辰史編）、岩波書店、査読有、2014、3－28　DOI なし

⑦ 岡田暁生、第一次世界大戦と演奏会文化の変質　－　音楽国有化の思想ならびに慈善コンサートを中心に、『現代の起点第一次世界大戦』シリーズ第三巻、『精神の変容』（岡田暁生・山室信一・小関隆・藤原辰史編）、岩波書店、査読有、2014、31-54 DOI なし

〔学会発表〕（計　１　件）

ヴォルクスワーゲン基金主催'The World during the First World War'（於ハノーヴァー）、

２０１３年１０月３０日　講演名「The First World War. A Trans-Disciplinary Study」（招待）

〔図書〕（計　３　件）
①　　岡田暁生　他、アルテスパブリッシング、すごいジャズには理由がある、2014、243

②岡田暁生、ちくま学芸文庫、オペラの終焉: リヒャルト・シュトラウスと〈バラの騎士〉の夢、2014、305

③岡田暁生、音楽之友社、リヒャルト・シュトラウス（作曲家◎人と作品シリーズ）、2014、258

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　岡田　暁生（OKADA, Akeo）
　京都大学・人文科学研究所・教授
　研究者番号：７０２４３１３６

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：